平成 20 年12月　1日
第 19 号

やかたばら環境通信

◇◇　発行　◇◇
八方原の環境を守る会
代表　原田憲一郎
電話　972・7602

水路管理の利便性を向上



水路用壁から圃場に降りる段差を低くするために、ブロックを積み上げました。共同作業なので瞬く間に完了

地区内の圃場用排水路は南北両側に約１００メートルの水田があります。そのため、用水路に近い圃場では排水路の草刈りや泥上げなどに、圃場の中の畦を遠回りして行く必要がありました。そのため、下流側の２本の排水路には木材を利用した仮橋が設けられていました。その２本については、昨年度安全性も考慮しながら鉄製のものに取り替えたところです。

今回はその上流側（小字名の西ノ池と金原の境）の排水路に新たな管理用渡り板を設置することになりました。

この場所は道路側と圃場側に高低差が大きく、また水路の幅の広いのでしっかりしたものが必要です。また、入り口にゲートを設けることで安全性にも配慮しました。同時に獣の侵入も防げると期待しています。

ゲートについては、既に水路上に置いている二本の渡り板にも設置していきたいと考えています。



鍵付きのゲートがついた渡り板

大会スローガン

美しい農村景観は地域の共同活動から

山口県農地・水・環境保全向上対策協議会は「平成20年度山口県農地・水・環境保全の集い」を11月26日、山口県総合保健会館で開催しました。八方原の環境を守る会も会員5名が出席し、講演や事例報告など有意義な研修となりました。

農林水産省の担当課長から情勢報告があった後、「やまぐち水土里ネット女性の会」会長藤井チエ子さんの講演がありました。藤井さんは「地域の問題は女性が一番敏感に感じている。地域集落の点検は女性の出番」と力強く提案しました。男性だけでは気づかない、異なる見方のあることは重要な示唆でした。

先進的な事例では、地域の特性を活かしながら独自の活動を展開する3団体が発表しました。どれも、大変興味深いものでした。



県農林水産部長　松永正実氏の祝辞

寒い時期の食中毒にも注意を　ノロウィルス

山口県山口環境保健所では11月4日、食品管理者対象の食中毒防止講習会を実施しました。地区では中村智子さんが受講して来られました。中村さんにお話を伺いました。

――夏場の食中毒は誰もが注意しますが、秋から冬にかけての食中毒も注意が必要だそうですね。

ノロウィルスは気温が低く空気が乾燥している11月から4月にかけて食中毒を引き起こしています。またノロウィルスによる食中毒は全国の患者数の半数以上と大変多い状況になっています。

――ノロウィルス食中毒はどんな症状ですか。

感染して1～2日後に吐き気、嘔吐、下痢や軽い発熱があります。症状は数日でなくなりますが、症状が無くなって1週間から1か月は糞便とともにウィルスが排出されます。

――感染経路はどうですか。

感染した調理従事者より汚染された食品を食べた場合や、患者の吐瀉物（としゃぶつ）などを介して感染する場合です。

――どんなことに注意すれば良いですか。

体調のすぐれない人には調理をさせないこと、また、石けんを十分泡立てたしっかりした手洗い、調理器具の次亜塩素酸ナトリウム（ハイターなど）を使用するか加熱をしっかりすることです。冷蔵庫の取っ手やトイレのドアノブなども塩素殺菌が必要です。また食材の加熱はしっかりと行いましょう。二枚貝などの調理は特に注意し、調理の後にはまな板などの殺菌、手指の洗浄消毒が必要です。

家庭菜園の収穫祭り

原田英樹さんの畑をつくりに来られる20名もの家庭菜園会員さんの収穫祭りが11月9日、ご自宅で行われました。

参加者は、野菜づくりの苦労や楽しみを語り合いながら、グラスを傾けていました。不思議なことに今まで野菜づくりに何の経験もない人が立派な作物を収穫することが多いとのことでした。

参加者はいろいろな経歴の持ち主、野菜づくりが取り持つ縁で、新しいおつきあいが始まりました。お世話をされていた原田照子さんは「こんなに皆さんが集まってくれて本当に嬉しい。来年も一生懸命お世話をしたい」と話してくれました。



光が丘の藤木さん、自慢のニンジンを手にしてポーズ

ふるさと劇団に大拍手　ふれあいサロン

八方原ふれあいサロンに岩屋地区の地元劇団が公演に訪れました。「岩屋ふるさと劇団青年座」という演劇グループです。毎年上郷公民館で行われる敬老会で数々の演劇を上演しているグループです。

11月16日の公演は特別に「おとっつあん」という小作品を用意し、ストーリーよりも、演技そのものの楽しさや、可笑しさに重点を置いた作品となっていました。戦国時代の一家の主人が家族をおいて戦に出て行きます。心配な家族は毎日のように主人の帰りを待ちます。そこへとなりの意地悪じいさんが冷やかしに現れ、悪態をついて家族の心配をあおります。しかし、数年経ったある日立派になったおとっつあんが帰ってきて、めでたしめでたしとなりました。

しっかりとした舞台や小道具など、手慣れた演出で雰囲気のあるセットをつくり、楽しい演技で多いに観客を湧かせました。



立派になったおとっつあんが帰ったところ

赤い羽根募金にご協力に感謝

10月に行われました「赤い羽根募金」は皆様の協力で四万六千五百円ものお金が集まりました。これらは社会福祉協議会運営する在宅福祉サービスや青少年の健全育成など、地域の福祉の充実に生かされます。

福祉委員　原田悦子